HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日韓語の副詞終了文に関する対照研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	裴, 明文
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13283号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72206
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Pei_Mingwen_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：　裴　明　文

主査　准教授　李　連珠
審査委員　副査　教　授　佐藤　知己
副査　教　授　清水　誠

学位論文題名
日韓語の副詞終了文に関する対照研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本研究は、主に日韓語の話し言葉にて共通して現れる文末を副詞で終える現象を「副詞終了文」として扱い、述語が文末に来る通常の文とは異なる副詞終了文を使用する理由はどこにあるのかを究明することを目的としている。長い間、申請者自ら収集した日韓語コーパス資料や申請者の内省から捉えた韓国語のデータを基にして、先ず両言語に共通の副詞の分類や副詞終了文の統語的分類など対照考察を行うために必要な共通の枠組みを新たに設定したうえで、最終的に副詞終了文の意味的用法を明らかにし、さらに日韓両言語の類似点や相違点までを浮き彫りにしている。

本論文の特記すべき研究成果として、以下にいくつか評価したい点を述べる。

先ず一つ目は、従来行なわれたことのない「副詞終了文」という実際の話し言葉に現れる両言語共通の現象を素材として、対照言語学的考察を行うために筆者自ら論理的考察の手順を工夫して、目的とした結果を挙げられた点をあげたい。日韓両言語とも副詞は、古くからよく研究されてきた分野であるものの、「副詞終了文」ということに絞った、徹底した研究は、本論文が初めてである。

次に二つ目は、「副詞終了文」を用いる根本的目的を明らかにするために、統語的に現れうる副詞終了文の種類を網羅して扱い、それらの意味用法を３つに絞って捉えている点である。その３つとして「強調の用法」、「斟酌委任の用法」、「感動詞的用法」を設定しており、強調の用法は、日韓両言語とも主に反復型終了文と後置型終了文における意味用法であり、用いられる副詞に関しても両言語がよく類似している点を、「斟酌委任の用法」は主に述語が表に出ない「述語省略型」における意味用法として、こちらも用いられる副詞は日韓語においてよく類似している点を明らかにしている。「感動詞的用法」は、文末の副詞を文中に復元できないという統語的特徴を持っている「文末副詞型」のみに現れる意味用法であり、両言語とも意味用法は同じく持っているものの、用いられる副詞の種類は異なることを明らかにしている。日本語では「まったく」、「もう」、「ちょっと」、「まったくもう」を、韓国語では「jinjja 本当」、「jeongmal 本当」、「aju とても」、「jjom すこし」、「maennal 毎日」、「jeongmalro jinjja 本当に本当」、「aju geunyang とてもただ」を副詞の例として挙げている。さらに、副詞本来の意味を無くしている「脱語彙化現象」が起きているかどうか、また終助詞との併用が可能か否かという二つの観点から対照考察を行った結果、使用される副詞の種類の数の点では韓国語が多い反面、脱語彙化現象の点からすれば、日本語の方が韓国語より「感動詞的用法」が進んでいるといえること、また日本語では否定の評価感情を表す場合にこの用法が限られていることを浮き彫りにしている。

最後、三つ目は、本論文に付録として付けられている資料そのものや分析に対する評価である。資料には、オノマトペ終了文を含めた副詞終了文のデータが網羅されており、また資料ごとに、副詞終了文の種類から意味用法など申請者の分析結果が綿密に記されている。

・学位授与に関する委員会の所見

審査では、以上で述べた点が評価できるという意見の他に、一つ一つの論証に至るまで説明にやや物足りなさを感じること、韓国語資料に対する和訳など日本語に細かい瑕疵が多々現れていることが指摘されたが、これらはどちらも本論文の評価を大きく下げるものではない。また、申請者は，既に国内外の学会において５件の口頭研究発表を行っており，その成果を論文３編にまとめて公開している。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で裴明文氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。